

学生個人のみには帰属するだけであり、従来の“聞く”や“書く”といった情報と大きな違いはない。そこで、クリッカーやipadといったモバイル端末を用いた双方向コミュニケーションのオンライン化を押し進めることで、多数の学生に“共有体験”を与えることが可能になると予測される。折しも、講義の双方向化を促す授業支援システムが本学でも確立しつつある。今後はこうした機材を用いて、さらに即応性を高めた授業を行っていききたい。

また、研究と教育をさらに密接に結び付ける働きかけを行っていききたい。たとえば、学部と大学院の交流の活性化などが考えられる。卒研ゼミと大学院の交流を活発にすることで、情報の交流を図る。このような働きは、学部生の研究能力を高め、質の高い卒業論文を完成させることにつながるとともに、研究への志向性を高め、ひいては大学院の活性化につながると予測される。

※1 本稿は2013年3月22日に行われた尚綱談話会の講演内容の一部を改編してまとめた。

「永遠の愛を宣べ伝えるために」

－演奏する極意を追い求めて－

土 田 定 克 (子ども学科講師)

【主旨】

「何故、何のためにピアノを弾くのか」——演奏することの意義を、物心ついた頃から追求してきた。青年期において掴んだそれは「人々の喜びのため」であった。しかしこの定義では、陰律や悲劇性を含む全ての音楽の存在意義を包括しきれなかった。そして最近、長い時を経てついに究極の意義に辿り着いた。それは「永遠の愛を宣べ伝えるため」である。

【背景】

この二年間、大切な人と別れることが相次いだ。震災をはじめ、家族の一人もこの世を離れていった。そして去年の暮には恩師メルジャノフ教授が永眠された。この敬愛する恩師の訃報を受けた時、なぜかシューベルト最晩年の『即興曲 変ト長調 作品90-3』が脳裏で流れ出した（この曲は少年の頃りが6つもある調号のせいで譜読みに挫折して以来、触れてこなかった曲である）。しかもそれに追い討ちをかけるかのように本学子ども学科の石田一彦教授が急逝された。石田先生はたった前日、学科会で「あんまりぎすぎすしない方がいいよ」と鶴の一声を放ったばかりである。益々この曲が、頭から離れない。その理由を究明したいという思いから本学学生にもこの曲を奏でてその感じたところを問うてみたりした。そうした探求の末にとうとう見出したものは、思い出を振り返るようなこの曲の底辺に流れる深い悲しみの雫であった。強いて言えば、これぞ涙を湛えた「惜別の歌」なのである。因みに、この曲の作られた丁度1827年の3月にシューベルトの深く慕っていたベートーヴェンが他界している。

その様に敬愛する人々を次々と見送る中で、普段にも増して「永遠」について思いを巡らす

ようになった。我々は一体どこへ行くのか。そしてそのためにはどう生きるべきで、今、どう奉職すべきなのか。これが未来とはいえ限りある残り時間を現実的に見据えた、今の私の最重要研究課題である。

よく言われることだが、芸術家の感性が捉えるものとは、その時宜にあって深い意味を持っていると言う。時にそのことが長じて、芸術家はその時代の精神性を表す代弁者とも呼ばれる。私も芸術家の端くれとして何故いまこの音楽が私を捕らえて離さないのか、よってこの音楽をどう弾くべきかという問いに対して正鵠を射た答えを見出そうと必死になる。そこに何か大切な真実が隠されている気がしてならないからである。

というわけで、まずどうしてこの「永遠の愛を宣べ伝えるために」という極意に至ったのか、その経緯を少し顧みたい。でない、この言葉が滑稽に聞こえる恐れがある。尤もこの言葉の発話者自身が己れの器を度外視している点において笑止千万の沙汰であることは否めない。しかしそれを承知の上で敢えてここに今までの経緯を記し残すことにより、亡き恩師を偲び悔悛の念を改める契機とし、現在の抱負の揺るぎない礎石としたい。

【過去】

まず初めに、演奏する醍醐味は演奏自体にあるのみならず、演奏会の構想、つまりプログラミングにも多く存することを押さえておきたい。それどころか演奏会の成否を分ける諸因の五割は、既にプログラミングで決まると言われる位である。それほど演奏会のプログラミングは重要であり、演奏家も多大な時間と労力を費やして構成を練るものである。その際に考慮すべき側面は多次元に亘る。例えば、曲順や調性における連関性、抑揚の強弱緩急や明暗の織り成す文脈性、各曲の立ち上がり方と消え入り方、また間や余韻の中でしか掴むことのできない残象……、つまり各曲が互いに引き立て合うようにプログラム全体を貫く起承転結の全素材が生き生きとした体験をもって味わい尽くされていなければならないのである。

ところで最近、ちょっとしたプログラムを見出した。色彩を極限までモノトーンに抑えた上、徐々に暗い深淵へと掘り下げていくプログラムである。興奮してモスクワ音楽院の恩師メドゥシェフスキー教授（音楽理論博士）に伝えたところ、師が「実に面白い！しかし聴衆が堪えられるかどうか……」と懸念されたプログラムである。しかしこのプログラムこそ、青年期には絶対に構成できなかったプログラミングであるのみならず、10年前に恩師メルジャノフ教授が自腹を切って強制した地平によく私の理解が辿り着いた証なのである。

繰り返すが、青年期に見出した演奏の意義は「人々の喜びのため」であった。当時、コンクール受賞によって生活が一変し、モスクワ音楽院の小ホールでリサイタルを開く機会も与えられた。私のプログラムの要点となる大曲は、第一部がラフマニノフの『コレルリの主題による変奏曲』、そして第二部がシューマンの『幻想曲』であった。端的に言うと第一部が闇で、第二部が光である。この闇から光へという過程はベートーヴェンの名句「艱難を突き抜けて歓喜に至れ」にも明らかなように、クラシック音楽の伝統に基づいた正統的なプログラムであり、いわば文句なく「人々に喜びをもたらす」プログラムであると思われた。

ところが演奏会も近づいてきてポスターが張り出されると、それを一瞥した恩師が怒り出す。「何てふざけたプログラムだ！絶対にシューマンが第一部でラフマニノフが第二部でなければならん！」。そして恩師は私を連れ出すと印刷屋に赴き、ポスターを一から刷り直すよう

に注文し、その費用をご自身の懐から出されたのである。

この出来事に際して教会の教える聴従により外見上は従ったものの、内面では激しい葛藤を堪えきれなかった。「僕のやりたかったことが、台無しになる」。そのため不本意ながら弾いた第二部を弾き終えるや否や、舞台袖に引きもせず一礼すると聴衆を慰めるために心温まるアンコール曲を弾き出した。

この行為を恩師が非常に不満に思ったこと、言うまでもない。

【現在】

この半年間で開催した一連の主要演奏会を並べると、「尚絅学院大学礼拝堂新設記念演奏会」、「宮城学院女子大学音楽科教員コンサート新年演奏会」、そして地元練馬文化センターにおける「土田定克ピアノ・スプリング・リサイタル」の三つである。この三つはどれもほぼ同一のプログラムで構成された演奏会だが、まさに上述した恩師の方向性に挑んでいる。ただしそれはかつてのように抗った不遜な挑戦ではなく、むしろ「あなたの高みに肖りたい」という思いの丈からきた、自分の限界への挑戦である。

プログラミングと一言で言っても、多くの場合その着手段階では終着点が見えないまま決めるほかに、ある一定の方向性と予感（「なぜか今これが絶対に必要」という引力のごとき直感）で決定したプログラムの上で練習や調査を始めることとなる。今回もその例に洩れずプログラムを決定し、練習や調査を始めた。ところが二つ目の演奏会の前で思わぬ発見に遭遇する。それは長年の謎だったシューマンの『幻想曲』の初版における、第一楽章と第三楽章の終結部がほぼ同一であることの意味である。

よく調べるとこの終結部はシューマンが愛したベートーヴェンの連作歌曲『遙かなる恋人に』作品98からの引用であることが判明した。そして原曲の譜面を見ると Nimm sie hindenn, diese Lieder、「さあ愛する君よ、受け取っておくれ。私の歌ったこれらの歌を」という歌詞が付いている。この事実は、シューマンの『幻想曲』が丸ごと愛の献呈歌であったことを示している。さらにシューマンがこの同じ終結部をそもそも両端楽章、つまり一般的解釈で言われる「青年期」でも「晩年期」でも響かせようとしたのには一体どういう意図があったのか。恐らく当時結婚を強く反対されていた若きシューマンが、無言歌という粹な形で、たとえどんなに永い時が経っても変わらぬ愛のあることをクララに告げたかったのではなからうか（因みにシューマンがクララへの一途な愛に生きた事実は余りにも有名である）。

かくして、シューマンの『幻想曲』がかの難解なラフマニノフ最晩年の『コレルリの主題による変奏曲』（難解すぎて国内では演奏会で弾かれる頻度が低いと聞く）と共に同舞台で弾くべきと予感した原因がついに解明したのである。この二曲が放つ一見対照的な性格の奥に、共鳴し合う一本の琴線が張られていたからである。ここでシューマンは「献身の愛」を描き、ラフマニノフはそれを極めた「捨身の愛」を描いた。とするならば、詰まるところこの両曲が挙って謳い上げているのは「永遠の愛」である。同じ方向性をもった愛である。それはまたの名を自己犠牲の愛ともいう、かの十字架上の永遠者の愛に行き着く愛である。この予期せぬ大発見が導火線となって「永遠の愛を宣べ伝えるために演奏する」という極意が閃いた。それが今、眼前の展望となって無限大に広がっている。

永遠の愛などと語り出すと近年は冷笑されるのが落ちかもしれない。履き違えた自由思想と

その世界観は留まることを知らず、夫婦の愛ですら、その神聖さに疑義を挟むのが現代である。だがそのような基軸なき時代に生きるからこそ、いま音楽を通して永遠の愛を伝えていく必要が生じている。それはもし主の御旨が許すのなら、多様性という名で孤立した人々の心に一致団結と調和による喜びを思い出させ、生きる力を呼び戻すきっかけとなるかもしれない。勿論、「永遠の愛」という言葉の奥には、神の愛が照準されていることは言うまでもない。

【永遠】

「永遠」について探求する中で、最近、発見したことがある。それは教会の教える永遠というものが、時間の無限性とか生命の停止を意味するものではないということである。そのため教会の教えによれば、来世において苦しみに遭う者も、その者の為に献ぜられる祈禱の力によって、永遠の苦しみから脱け出て神の光榮に満ちた永遠へと入ることができるという。そしてその可能性は最後の審判の時まで続くという。このことについてヴラジーミル・ロースキイは次のように述べている。

「仮にもし運動、変化、一定の状態から他の状態への移動というものが時間の範疇であったとしても、それら各々に静止、不変、不動というあたかも静的な永遠の概念を対置することはできない。それはプラトンの思弁の世界における永遠であって、生ける神の永遠ではない。もし神が永遠の中に生きているのならば、この生きた永遠は、運動する時間と静止した永劫という対置を超越したものでなければならない」(Лосский В.Н. Очерк мистического богословия Восточной Церкви. Догматическое богословие М., 1991. стр. 233)。

運動する時間と静止した永劫という対置をはるかに超越するような「生きた永遠」があるとは、想像すらできない次元であった。この言葉が恩師亡き後の私に与えた光と希望の力は計り知れない。ならば死者のために奉ぜられる祈禱をはじめ、追悼演奏会などもより深い意味と未知なる可能性を帯びてくる。私達は永遠に生き、神の御前で死滅する人格は存在しないからである。

「永遠」など所詮、人間には知ることの許されない神秘の次元である。が、現実として、私達は必ず永遠へ入らなければならず、今この瞬間にも私達は「永遠」に包まれ、「永遠」と隣り合わせで生きている。この永遠のうちに生きているという神の愛。ここで捉えられるエネルギーこそ、生演奏に聖なる息吹を賜う力であり、偉大な名作・名演が証すまでもなく、人々に真の喜びをもたらす音楽の源泉でなくて何であろうか。

【未来】

留学してまだ間もない頃、当地でお世話してくれた知人が父親を亡くした。その時にその知人が語った言葉が今でも深く印象に残っている。

「ある人から聞いたんだ。人はね、生まれたときは1/4人前。で、結婚して2/4人前。つまりようやく半人前になったってこと。続いて子供を育てて3/4人前。そしてね、」と知人は嬉しいとも悲しいともつかない表情で続けた。「親が死んで、一人前、ってさ」。

「違う」と頭では分かっているけど、キリストを失った弟子達はこんな気持ちだったのかと恩

師を失って想像したりした。何か今までずっと判然としなかったものが突如自分の中で固まった。それが何であり何故そうなったのかは全く分からない。分かっていることはただ一つ。「僕は、恩師の分も弾かなければならない」。これが、今の私の抱負の全て。その上で、演奏によって得られた知識や技量を色々な形で学生や未来を担う子供達へ伝えていきたい。そしてその際にもしも万が一、やる気をなくした若者や生きることに疲れた人々の心に、また正邪判別の覚束なくなった我が国の思想的土壌に、真実の愛の潤いをもたらすことができたなら幸いである ―― 授けられた音楽という言葉の雫を通して。

尚綱学院での研究・教育の抱負

細 矢 理 奈（健康栄養学科講師）

私は尚綱学院大学に着任して今年で3年目になります。担当している講義は、主に「給食経営管理論」「給食経営管理実習」「臨地実習」「総合演習」「管理栄養士活動論」などの管理栄養士国家試験に関わる専門教育科目です。尚綱学院大学に着任してから、初めて講義・実習を担当するようになり、四苦八苦しながら自分の講義・実習スタイルを作っております。今回、「紀要」にて「尚綱学院での研究・教育の抱負、について投稿させて頂く機会を頂戴しましたので未熟ではありますが述べさせていただきますと思います。

【研究に対する抱負】

着任以前は臨床現場での勤務でしたので、さまざまな病態栄養に関わる取り組みから始まり、最終的には「摂食・嚥下障害」、「経腸栄養・経静脈栄養」、「褥瘡」、「呼吸器疾患（特にCOPD）」と「栄養管理」についての実践的研究について発表や専門誌の投稿掲載、各大学・短期大学・専門学校などの実習受け入れ指導を日常業務と並行して行っておりました。2011年4月より尚綱学院大学に着任し、給食経営管理や臨地実習についての講義・実習する機会を得たこと、また諸先生方との出逢いを通して発見した新たなテーマについて研究中です。現在進行中の研究についていくつか紹介します。

①「給食施設におけるリスクマネジメント」の研究

事故とは、「予期せずに人や物などに損傷や損害を与える出来事」のことを指し、医療現場に限ると、厚生労働省リスクマネジメントスタンダードマニュアル作成委員会「リスクマネジメントマニュアル作成指針」では「医療に関わる場所で、医療の全過程において発生する全ての人身事故で、以下の場合を含む。なお、医療従事者の過誤、過失の有無を問わない。ア. 死亡、生命の危険、症状の悪化などの身体的被害および苦痛、不安などの精神的被害が生じた場合。イ. 患者が廊下で転倒し、負傷した事例のように、医療行為とは直接関係しない場合。ウ. 患者についてだけでなく、注射針の誤刺のように、医療従事者に被害が生じた場合。」と定義されています。

これを給食現場に置き換えると、食中毒、誤配膳、アレルギーなど禁止食品の見逃し、異物混入、および火傷、切り傷など調理作業中の事故などが該当します。また、このよう